

# 戦争の歴史を知っておかねば

神戸女学院大学文学部総合文化学科教授 石川 康宏

こんにちは、神戸女学院大学の石川康宏です。前回は、日米関係の締めくくりとして、力ばかりがものをいう世界から、各国が共同して平和をめざすところへの世界構造の大きな変化を見ておきました。

今回からは、「財界いいなり」「アメリカいいなり」につづく、日本社会の3つ目の異常というべき、侵略戦争を正当化する力の強さについて見ていきます。まずは、戦争の歴史そのものです。

## 未来のために過去を知る、 悲惨を追体験することの大切さ

「かつて日本が行った戦争は、領土拡大のためのものであり、残念ながら正義の戦争ではありませんでした」。こんな話をしても、大学に入学したばかりの学生たちは、「そうですね」と簡単にうなずいてはくれません。「勉強したことがあります」「日本史はやらなかったの」といった声がかなりの割合で出てきます。くわえて「あれは正しい戦争」「自衛の戦争だった」という主張が、大手のメディアでも繰り返されていますから、はじめて「侵略」といわれて面食らう学生も少なくないようです。

私は、1945年の敗戦までに、日本が50年間もアジアへの侵略を繰り返したこと（1894年日清戦争、1904年日露戦争、1910年韓国併合、1915年中国に21カ条の要求、1918年シベリア出兵、1931年満州事変、1937年中国への全面戦争、1941年アジア太平洋戦争など）、そして敗戦後に、アメリカによる7年間の軍事占領を体験したこと——このふたつの事実をよく知らなければ、現代世界における日本の立ち位置を、うまく理解することはできないものと思っています。

今日の日本はなぜこうまでアジアで孤立しているのか（仲良しの国は1つありませんよね）、また、どうしてこんなに「アメリカのいいなり」になっているのか（これについてはすでに書きました）——このような「現在」をもたらした「過去」の歴史をしっかりと知ることは、日本の「未来」の的確な選択のために、欠くことのできないものになっています。

さて、大学で戦争について語る時、私は、授業の早い段階で、実際の戦場の映像を見せるようにしています。自由に議論をしていくと、「あの戦争は仕方なかった」「そうはいえないんじゃないか」と、学生たちはそれなりに意見を述べあいます。しかし、各国の兵士だけでなく、子どもや赤ん坊、女性、年寄りをふくむ、たくさんの人間の死体が、ポロ布のように転がる戦場の様子を見せると、学生たちは、ほぼ例外なく押し黙ります。教室がシンとするのです。「これは生半可な知識で、判断を下してよい問題ではない」「今の自分にそれほどの力があるだろうか」。学生たちは、想像をはるかに超える映像の悲惨を、そのように受け止めていくのです。

「どんな理由があっても戦争をしてはいけません」というのは、多くの戦争体験者が語ることで、それは目で見た「言葉に尽くせない凄惨な現実」の記憶と一体のもので、その重みを理解するには、戦場と戦争の生々しい現実を、わずかではあっても追体験していくことが必要になってきます。

## 膨らんでいく領土拡大への野心

2015年は、第2次大戦の終結から70年の節目です。世界各地で、記念の行事が行われるでしょう。

2度とあの悲劇を繰り返してはならない——そのことを振り返る世界の認識の根本は、ドイツ、イタリア、日本のしたことは、どんな大義ももたない不正義の侵略だったというものです。この評価をくつがえそうとするものは、ヨーロッパのネオ・ナチなどごく一部の極右勢力に限られます——と言い切ってしまいたいところですが、じつはその最大の例外が、残念ながらこの日本の社会となっています。

なぜそうした大きなずれが生まれてしまったのか。その理由の説明に進む前に、50年間の戦争について、ポイントのいくつかを紹介しておきます。

○日清・日露戦争を、日本は、朝鮮半島の支配を目的に行いました。2つの戦争に勝利した後、1910年に行った韓国併合（半島全体を日本の植民地にした）は、その目的の達成を意味するものでした。その後、朝鮮半島は、中国侵略への重要な足場となっていきます。

○日清戦争に勝利した日本は、1895年に台湾を植民地としました。朝鮮とあわせて植民地への支配は、1945年の敗戦までつづき、日本軍は民族の誇りを踏みじめる残虐な行為を繰り返しました。

○1915年に中国に示した21カ条の要求は、政府の政治・経済・軍事顧問に日本人をつけるなど、中国全土への日本の支配権を求めたものでした。そこには、中国をわがものにしたいという日本の欲求が、きわめてわかりやすい形で現れています。

○1918年からのシベリア出兵は、社会主義をめざすソ連の政府（1917年の成立）を、共同で倒そうというイギリスの呼びかけをきっかけとしたものでした。この時、日本は他のどの国よりも多くの軍隊を送り、企てが失敗して各国が撤退する中でも、最後までシベリアに居すわりつづけました。これもまた新たな領土の獲得をめざしてのことでした。

## 日本の生命線・生存圏という勝手な主張

○1931年に、日本軍は「満州事変」の名で、いよいよ中国東北部に攻め込みます。いわゆる15年戦争の始まりです。つづく1932年、日本は中国領内に「満州国」を建国しました。その実態は日本の植民地でしたが、独立国の体裁をとることで、

国際社会の批判をかわそうとしたものです。しかし、このごまかしは通用せず、結局、日本は1933年に国際連盟（歴史上初の平和のための世界的機構）を脱退し、同じく脱退したドイツ、イタリアと同盟を組み、第2次世界大戦に突き進みます。

○1937年、日本は中国との全面戦争に入ります。戦争を正当化する理由とされたのは、中国は日本の「生命線」という主張でした。6年前の「満州事変」の時には満州と蒙古（現在の内モンゴル地区）が日本の「生命線」だとされ、1941年の太平洋戦争の開始にあたっては、西はインド、南はオーストラリアを含む広大な「大東亜」が日本の「生存圏」だとされました。日本の存立のためだと言えさえすれば、どこまでも侵略の範囲を広げることができるとするもので、驚くほどに身勝手に幼稚な議論です。「自存自衛」のスローガンも、「自衛」の名で侵略を正当化するものでしかありませんでした。

○日中全面戦争以後、1945年までの日本の犠牲者は、軍民あわせて310万人とされています。同じ時期のアジアの犠牲者は少なくとも2000万人と言われます。これほどの命を奪っておきながら、これを「アジア解放の戦争」とすることには、まるで道理がとおりません。

戦場だけでなく植民地や占領地でも、無抵抗な市民の虐殺、強制労働、数万とも十数万ともいわれる女性を性奴隷にした「慰安婦」制度など、日本の軍隊の野蛮さは、当時の世界でも際立ったものとなりました。

敗戦から69年がたちました。しかし、アジアには今も、これらの戦争で心身に深い傷を負った人たちが、たくさん生活しています。その痛みを心に寄せ、この国が行った戦争への責任を自覚する姿勢をもたなければ、日本は、いつまでたってもアジアの本当の仲間になることができないでしょう。

戦争の「過去」を知るということは、こうした新しい「未来」を切り開く構えをはっきりさせるということでもあるのです。

今回はここまでです。では、またお会いしましょう。